

たあちゃんががんばろうね

フロンティア・ブックス



FRONTIER



BOOK

KOBUNDO

精薄児の母の記録

たあちゃんががんばろうね

水野美代著



カット・谷内六郎

弘文堂

たあちゃんがんばろうね

水野 美代

みずの みよ

1922年に秋田県大館市に生まれる

札幌高等技芸女学校卒業。主婦

現住所・東京都練馬区向山町1467

昭和三八年六月一〇日 初版発行
昭和三八年六月二五日 再版発行

定価二八〇円

著

発行

印刷所

発行所 株式会社

本社 東京都千代田区

営業所 東京都千代田区

電話
振替

まえがき

私の息子は、満三才を過ぎてから突然日本脳炎におそわれ、病いの末に精神薄弱者になり、今年十七才になりました。

かつては、永久保護以外にはないと思われた長男。その息子と歩いて来た、さまざまな思い出を綴ってみようと思ひ立ちましたのは、ちょうど息子が、特殊教育の手の中に義務教育課程を終えて、社会生活者のひとりとして出発することのできた一年まえのことでした。

けれどもこれを発表するという決心がつくまでには、私自身の四十年の人生の中で経験した、みにくいことなども引き合い出さなければなりませんので、いくとも大きなためらいがありました。しかし、ひとりの母親としての私は、自分の生命を分けた子供を生かしてゆくために、一人でも多くの人にこうした生活の実際を知っていただき、援けの手を貸してほしいと願わずにはいられません。

世俗にいわれる、つける薬を持たない子供。ある日は、迷い子になったこの子を探し歩

いた道々、事故死を仮想して自分の安息を願ったりしながらも、きまって無意識のうちに、救いのために行動しているのです。

そして、どんなにこちらがもがいても、遂には、生活訓練による指導と、永続性のある愛情を注ぐより以外に、方法はないということを知らなければならなかった歲月。

そうした諦めを自分のものとし、深い苦しみほど、かえって来る喜びも大きいと自分にいい聞かせることが出来るようになるまでに、もう十五年の年月が流れてしまいました。そしていまもきつとどこかで、かつての私のように、夜が明けて来るのか、闇がこのまま続くのか、と辛い思いで過しているに違いない仲間たちに、私はこの記録を通じて、あなたは決して一人ではありませんと呼びかけることが出来たらと思います。

けれどもこの仕事が、そういう私の願いにふさわしいものであるという自信はありませんし、私もまた毎日おなじ迷いの中にいるところ貧しい母親でしかありません。それでもやっぱり私は、たとえこの道がどんなに迷路の連続でも、与えられた自分の道を、しっかりといておしんで生きてゆかなければと思っています。

この記録を綴るにつきましては、その真実を語る必要から、長上や肉親などについても触れましたので、その非礼をおゆるしいただきたいと願って居ります。また、私と息子にご縁のあったすべての方々に、ここからのお礼を申しあげたいと思います。

精神薄弱者は、精神異常者でもなければ精神病患者でもありません。まして、病源菌をまきちらす伝染病患者でもないのです。この人たちは、すくなくとも、卑しい性根を持ったりする正常人にくらべて、はるかに平和で善良な社会構成員の一人だと信じます。適切な指導と仕事を与えられ、人びとがその不足を毛嫌いさえしなければ、この人たちの生きてゆくことには障害のない場合も多いのです。

私はこうした子供の母親として、こう信じ、たゆみなくこの子らに力を貸してやりたいと願っています。

巷の片隅に生きるひとりの母親の祈りを、こうして公けにすることが出来ましたのは、ひとえに弘文堂の編集部長田村勝夫さまのご好意とお力づけによります。このお力づけが与えられなければ、この本は決して生まれなかったと思います。おさんどん主婦の私が、半分泣きべそをかきながらのこの仕事に、終始手をとってご指導いただいた編集部の生田栄子さまはじめ弘文堂のみなさまと、励ましをいただいた西谷三四郎先生に、心からのお礼を申しあげます。

昭和三十八年五月十五日

水野 美代

目次

まえがき

1 北風の吹く日……………一

悲しい卒業式／母となつて

流浪の娘時代

2 日本脳炎におそわれて……………一四

平和な朝／息子の発病

札幌への逃避行／さまよひの日々

3 石神井川のほとり……………四五

迷い子／いじめっ子／幼い天使たち

4 吹雪の道……………六七

特殊学級へ／赤い自転車

弟の死と趣味の店

5 たあちやんががんばろうね……………九三

教師と母の連絡帖／校内合宿

うしろ姿

6 忠雄の日記……………二九

中学二年の日記／中学三年の日記

7 つまづいてもころんでも……………三三

くりかえす校外実習／職場見学

やるせない日々／つる草の実

8 母のねがい……………三八

性教育の悩み／拾った時計

その親たち／迷いごころ

9 雲の晴れ間に……………三四

このごろ／青空が見える

装幀・八木沢茂夫

カバー絵・谷内六郎

1 北風の吹く日

悲しい卒業式

豊島園のコンクリート塀に沿って、その裏手の野球グラウンドの辺りまで来ると、樹齡何百年の樹木が見える。中でも、冬の櫟けやきが持っている孤独さが、私はとりわけ好きである。尾長の声があざやかにきこえる朝などは、こころがつうんと澄んでくる。

私がここに住んでから、もう十年になる。

昭和三十七年三月二十二日の朝、私は長男といっしょに、さまざまな思いを抱いて通いなれたこの道を、ひとしおの感慨を覚えながら歩いていた。例年になくあたたかい冬であったが、今日は珍らしく冷たい北風が吹いていた。

教育大学附属大塚養護学校の卒業式の日であった。知恵おくれの子どもたちのためのこの学校に、私の長男忠雄も中学生としてお世話になり、今日ようやく卒業式を迎えた。

卒業式場には、大学構内にある古い合併教室が借りられていた。この教室は、晴れの式場としてはささやかすぎるような気もしたけれども、百名余りの集会場としては手ごろの広さなのかも知れない。

私は、式のはじまるのを待ちながら、火の気のない講堂の固い木椅子に坐っていた。強い早春の風が容赦なく足もとを通りすぎ、その冷めたさが背中にしみとおり、身体が小さいにふるえた。

卒業生は二十一名である。そのうち十二名が長男を含めた中学生であった。学校側からは、教官、関係者が十二名と来賓が六名、それに、卒業生全員の父兄と、在校生の父兄有志。それに加えて四十名の在校生が、先輩の門出を祝ってこの式に参加していた。

何というささやかな卒業式であろう。晴れやかな色彩といえば、張りめぐらされた紅白の幕と、演卓の上の銀色の籠に盛られた花だけであった。花籠には、カーネーションやストックなどの春の花がこぼれそうに盛られてあり、その花をすかして来賓席に、長身白^{はくせき}皙の学長、朝永振一郎先生のお姿が見られた。

式次第がすすめられて、教頭先生の学事報告が終ると、卒業証書が授与される。卒業生は、名前が呼ばれると大きな返事をして立ち上がり、ひとりひとり壇上に登ってゆく。

そこから見ただけでは、普通の子供と少しの違いも認められない子供。歩行が困難で、

登壇までに時間のかかる子供。極度の緊張からうつむいたまま顔も上げられずにいる女の子もいれば、あからさまな障害を見せたいじらしい子供もいる。一人で証書を受けられないほどの障害を持った子供には、担任の教師が付き添った。

式の途中でつまずきでもあってはと案じて、親たちがせつない視線を注ぐうちに、無事に証書の授与が終った。

続いて卒業生全員に賞状が与えられる。名前を呼ばれた生徒が登壇すると、やがて校長先生のまるみを帯びたやわらかいお声がきこえてくる。

「あなたはいつもしんせつで、みんなに好かれ、道具も大切にしましたのでこれを賞します」「あなたはよく学級内をまとめ、実習にもまじめに参加しましたのでこれを賞します」賞状の一枚一枚には、生徒の一番すぐれたところを賞める文字が綴られていた。

生徒が賞状を受けて一礼すると、そのつど式場に盛んな拍手が湧いた。これは、この学校の卒業式の中で、一番長い時間をあてられる大切な式次第であった。そして教師と親たちが、血の通った教育の成果を確かめあう貴重な時間でもあった。

やがて息子にその番がきた。知能指数は五五、身長一五五センチ、体重は四五キロ、ここ一、二年の間に、めっきり体力を充実させた忠雄は、少年らしい、たくましい背を私に

向けて、壇上に直立している。そして、新らしい学生服の上着の裾をつかんで下にひくようにしては、自分自身を落ちつけようとしているらしい。息子の緊張のところが、そのまま離れて坐っている私にも伝わってくるような気がした。

「水野忠雄君。あなたはいつも笑顔で、きめられたことはかならずまもり、実習態度も非常にまじめであったのでこれを賞します」校長先生のお声をききながら、私の心には遠慮を忘れた共感が湧き、目頭があたたかく濡れてくるのだった。

人に意地わるすることを知らない忠雄。うそをつくことを知らない忠雄。泣き虫で我執は強いけれども、長上の説諭には笑顔で納得する忠雄。楽しいことがあれば、満面をほころばせて笑いこぼる忠雄。辛いに違いなかった作業や実習にも、唇を噛んで順応しようと努めた忠雄。物ごとを疑ってみることを知らず、まっすぐに人の言葉を信じてしまう忠雄。

賞状の数行には、ありのままの忠雄の姿がはっきりと見えるようで、思わず微笑さえうかぶ思いであった。

私は、数年前から、この学校のささやかな卒業式を少しでも賑やかにしてやりたいと願って、毎年息子の先輩たちの卒業式に参列してきた。そのたびに、賞状を受ける子供たちの姿に、ただ涙もなく涙が流れて仕方がなかった。けれども忠雄の姿には、不思議とそう

いう甘い涙はこぼれなかった。今日の私は傍観者ではなかったからであろうか。

やがて来賓各位の祝辞が読みあげられる。教育大学附属中学校を代表されたお言葉の中には「かつて、これほど感激した卒業式に会ったことはありません。流感の折に、私どもの学校では遂に数日の休校を致しましたのに、御校が一日の休校もなく通したということだけでも、あなた方の勝利といえます」とあった。

続いて朝永学長の祝辞がはじまる。「校長先生をはじめ、来賓各位のお祝辞にすべてがつくされており、私は、あらためて申しあげるべき言葉を持ちません。ただ、今日までの長い間のご父兄のご心中と、今日の日の教官諸氏のおよろこびを深くお察しするばかりです」その短かいお言葉の中に、私は人間としての共感を見たような気がした。そしてその時ばかりは、静かに、涙がこぼれ落ちるにまかせていた。

「あるいはこの子たちが、人なみの人間に育つかも知れないなどと、はかない夢を見たこともございました。そのように不明な私たちを励まされ、今日までお力をお貸し下された諸先生には、申しあげるべきお礼の言葉さえも見いだせません」言葉をとぎらせて語っている父兄代表の謝辞に、頭を垂れて泣いているのはけっして親ばかりではない。

報われることのあまりにも少ないこの仕事をえらばれて、一日も、身もこころも休まることなく今日まで指導をしてこられた教官の方々も、皆いちように瞳をうるませて、たし

かに泣いておられるのであった。

しかし、今日を門出の日と呼ぶには、およそ縁遠い私たちの心境である。本当のことをいえば、義務教育の中におかれていた九年間が、唯一の安息の期間であった。この子たちを自立の道に発たせなければならぬ日、それは親たちにとっても、嫌でも自分の能力や信念と対決しなければならぬ日なのであった。

学校という力強い庇護の手から離されてしまった私たちは、もしも強い風雨に倒されそうになった時、一体なににすがってゆけばいいのであろう。そうして、いつになったら、本当の青空を仰ぐところになれるのであろうか。

子供の卒業式という晴れの席に参列しながら私は、今日からはじまる本当の苦しみを思っ
って消え入りたいような気持であった。

母となって

昭和二十一年一月二十日、この日の未明から、私は、はじめて母となる陣痛の床に
っていた。間隔をおいておこる苦痛の時間がすこしずつ縮まってきて、母になる時が、いま
本当に自分の上にはじまっているということ、信じられないような歓びであった。

私の息子は、高らかなうぶ声をあげて誕生した。遠くなりそうな意識の中で、私はかつ

て経験したことのない平和な、やさしい気持ちにひたっていた。

「立派な忠雄だよ」その誕生に手を貸してくれた実家の母に抱かれた長男には、すでに、双方の祖父の名から一字ずつ貰った名前がきめられていた。

まだ小学生の妹は、私に陣痛がはじまると、留守にしていた母に迎えを出したり、夜ふけのストーブに火を入れたりして、意外なたのもしさを見せてくれた。そして、叔母さんという肩書きにふさわしい落ちつきぶりで、うぶ湯をすませたばかりでお義理にも可愛いとはいえない甥の上に、覆いかぶさるようにして、一心にその顔に見いつていた。

その日は、ちょうど亡父の四十九日に当たっていた。

私が父の看護をかねて郷里の秋田に帰って来たのは、昨年暮に近い雪の日であった。父は、その健康については疑う者もないほどの活動家で、いつも青年のようにたのしく見えていた。しかしその年月が借り物でもあったかのように、突然その活動力が失なわれてから、まだいく月にもならなかった。

私が、流産の懸念がなくなってから、やっと父の枕辺についた夜、まだ生まれない孫のために、宮参りの晴れ着を買っておいてくれた父は、つとめて快活なよろこびの声をあげる私に、満足そうにほほえみを見せてくれた。

それから八日目の夜、放浪性が一生を支配し、浪漫的でさえあった父の六十年の生涯が

終った。遺体は、それを灰にする木材と一緒に雪橇の上に横たえられ、長い行列の先頭を進んだ。気丈な母は、ただ口無しのようになって、その一行には加わらず、ひっそりと祭壇の前に坐りつくしていた。

母は、四十年近い父との結婚生活の間に、貧困と七人の子供にかまけて、夫の健康には特別の関心を払えなかったことが、泣いても泣ききれない思いだとくり返し語った。

私の息子、忠雄は、この空隙を埋める天使のように、大きなうぶ声をあげて産まれたのであった。

翌年の六月には、娘美知子が恵まれた。彼女は、不覚にも、母の私がそれと気づかぬ間に胎内に成長をはじめていた。私は三カ月たってからそれを確認したのであった。

娘は、けっして望まれずにこの世に生を受けたのである。このことについて私は、娘に、どんなに詫びても詫びきれるものではないと思っている。しかもこの子がものごとろつくようになってから、知恵の遅れてしまった兄をたすけて、母の私にも、どれほど大きな励ましを与えてくれたかを思うたびに、私の悔恨は深くなっていった。

娘が中学三年に進級し、その話題に自信が持てるようになったある日のこと、私は、おいしいお茶をいれながら、彼女にこの真実を語ってみた。

「アパート生活の掃除当番の途中で、気分が悪くなって倒れた時、はじめてあなたがお腹の中にいると知ったなんて、ひどいことだと思うでしょうね。ゆるしてちょうだいね」そういう私に、娘はテレ臭そうに「平気よ」といったきり、いつまでもテーブルのふきんをまさぐっていた。

結婚の生理が、意図しなくても妊娠可能なものであるということをすでに知識として知っていた娘は、私の告白にとり乱すようなことはなかったのである。

こうした告白は、あるいは自己逃避にすぎなくて、自分の責任で墓場まで持ってゆくべきものかも知れないけれども、私は、自分のこのころのみじめさを超えても、娘に結婚の生理とその厳粛さを教えてやりたかったし、少なくとも、祝福に充ちた子供を産むことをせつない祈りとして伝えておきたいと願ったのであった。

流浪の娘時代

北海道の五月はアカシアの季節である。そのころやっと六才になったばかりの私は、ある寒村の駅のホームで、両親を待ちながら立ちつくしていた。

昭和のはじめの不況時代に、富も学歴もない両親の生活は非常に不遇であった。

あたらしい生活の開拓を求めて、父が流浪の旅を続けていたころ、私は、なんともそう